様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月１０日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010～2012
課題番号：22653122
研究課題名（和文）「気になる」幼児に対する運動発達支援を通した自己コントロール感の形成
研究課題名（英文）The formation of a feeling of self-control for children who require special care through motor development support
研究代表者
本郷　一夫（HONGO KAZUO）
東北大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：30173652

研究成果の概要（和文）：
本研究では、「気になる」幼児の運動バランスを発達させると同時に自己コントロール感を形成することを目的とした。一連の研究から、(1) 「気になる」子どもは２つの課題を同時にこなす二重課題に困難さを持っていること、(2)「気になる」子どもは、健常児に比べて運動に対する自己評価が低いことが示唆された。以上の結果から、運動調整の発達は「気になる」子どもの特徴を捉えるための重要な指標となり得ること、また運動協応の遅れが有能感・自尊感情の低下や対人関係に影響することが示唆された。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of the present study was to develop motor coordination and to form a self-control feeling in children who required special care (CRSC). It was shown by a series of studies that (1) CRSC have difficulty for dual task in motor coordination, (2) the self-evaluation of CRSC for the exercise was lower than normal children. It was suggested that motor coordination could be an important index to catch the characteristic of CRSC and the delay of motor coordination influence the personal relationships and competence.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	800,000	0	800,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,800,000	300,000	2,100,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育
キーワード：「気になる」子、運動調整、自己コントロール感、二重課題

１．研究開始当初の背景

近年、幼児期において、障害の判定はなされていないが対人関係や情動統制などに問題を抱える、いわゆる「気になる」子どもの保育の進め方が問題となってきている。このような「気になる」子どもの特徴として運動バランスの悪さがあげられる。すなわち、「走る」「飛ぶ」といった基礎運動においては遅れを示さないが、「スキップ」「ボールのドリブル」などの身体の調整を必要とする運動に困難さを抱えることが多い。この運動バランスの問題は情動調整や自己コントロール感

の問題とも関連している。すなわち、運動調整ができるようになる情動調整も可能になり、自己コントロール感も感じるようになると考えられる。

２．研究の目的

本研究では、「気になる」幼児に対する運動発達支援を通して、運動バランスを発達させると同時に自己コントロール感を形成することを目的とした。

３．研究の方法

(1)運動発達支援の方法

保育所の「気になる」子どもとクラスの他児に焦点を当て、宮城県サッカー協会が実施しているサッカーの巡回指導（キッズ・プログラム）と連携して、運動発達支援を行った。運動指導自体は、宮城県サッカー協会のコーチ２名が行った。

(2)運動指導場面の構成（独立変数）

① 基礎運動場面：　直線走、三角走による基礎的運動能力の測定を行った。

②コーディネーション場面：　ジグザク走、バーくぐりなどを組み合わせたコーディネーション運動パターンをいくつか用意し、運動コントロールの訓練と測定を行った。

③ボール・コントロール場面：　ボールのドリブル、シュートなどボールを用いた運動コントロールの訓練と測定を行った。

④サッカーのミニ・ゲーム場面：　ルールを簡略化したサッカーのミニ・ゲーム（各チーム６人程度の子どもから構成）を実施し、集団場面における運動コントロールの訓練を行った。

(3)自己コントロール感の測定（従属変数）

①行動観察：運動指導場面においては、子どもの運動発達、身体コントロール、ミニ・ゲームへの参加度（積極性）を捉えるために、ライフコーダーを子どもに装着するとともにビデオ３台で子どもの動きを追った。なお、運動コントロールについては、幼児集団における支援法を検討するため、「気になる」子どもだけではなく、クラスの他児も同時に追跡した。

②「気になる」子どもへのインタビュー：運動に関する自己コントロール感について、定期的に質問を行った。

③保育者へのアンケート：　「気になる」子どもの自己コントロール感について、保育者にアンケート調査を行った。

４．研究成果

＜研究Ｉ＞サッカーを通した運動コントロール

(1) 目的：　一般に、「気になる」子ども、発達障害児は、運動調整の難しさに加え、運動に対する苦手意識をもちやすいことが指摘されている。そのような観点から、研究２では、発達障害児に焦点を当て、運動調整と有能感との関連を明らかにすることを目的とした。

(2) 対象児：　保育所の 4・5 歳児クラスの子ども 25 名（4 歳児 11 名、5 歳児 14 名；男児 13 名、女児 12 名）。

(3) 運動プログラム：

①マーカーとり：　10 秒間に取ることができたマーカーの数を得点とした。

②まとあて：　まとから離れた線からボールを４回投げ、成功した線を得点とした。

③ゲーム：　３分間行われた。ボール１個条件とボール２個条件があった。

④自己評価：　「気になる」子ども２名、障害児３名、マッチング児５名に対して、上手にできたと思うかを「そう思わない(1)」から「とてもそう思う(4)」までの４段階で評定するよう求めた。

(4) 運動得点の結果：　図１から、８月においては、「気になる」子どもとマッチング児の得点はほぼ同じであるが、２月にはマッチング児の得点がやや高くなっていた。＜マーカーとり＞と＜まとあて＞について、「気になる」子どもと障害児を除き、年齢×時期の２要因の分散分析を行った。＜マーカーとり＞には有意差は認められなかった。＜まとあて＞については、５歳児の方が４歳児よりも得点が高く、さらに両年齢ともに８月から２月にかけて得点が上昇していた。

(5) 自己評定得点：　図２には自己評価得点の結果が示されている。ここから、障害児、マッチング児と比較して、特に「気になる」子どもの＜マーカーとり＞と＜まとあて＞の自己評定得点が８月から２月にかけて減少したことが分かる。

(6) 考察：　以上の結果から、運動調整の発達は「気になる」子どもの特徴を捉えるための重要な指標となり得ること、運動協応の遅れが有能感・自尊感情の低下や対人関係に影響することが示唆された。

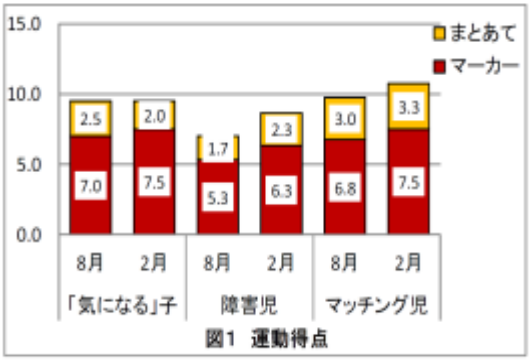

図1 運動得点

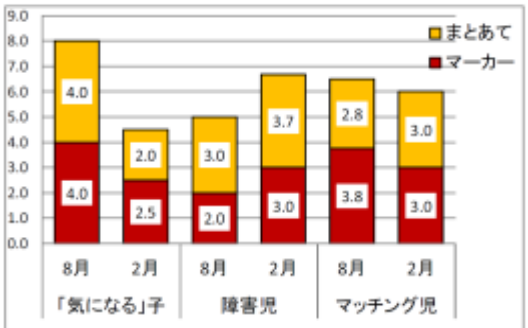

図2 自己評定得点

＜研究２＞しっかり渡せ王冠リレー

(1)目的： 「不織布リレー」を改善した「王冠リレー」における「気になる」子どもの運動特徴及び運動協応の特徴について検討することを目的とした。

(2) 対象児： ４歳児クラス（79 名：男児 41 名、女児 38 名）、５歳児クラス（68 名：男児 38 名、女児 30 名）の幼児 147 名（男児 79 名､女児 68 名)を分析の対象とした。このうち、気になる子どもは４歳児クラス４名、５歳児クラス４名の計８名であった。

(3) 手続き： 頭にのせた王冠を落とさないようにコースを歩き、グループ対抗で速さを競うゲームを行った(図３、４参照)。リレーは２種類行われた。すなわち、①１人ずつ王冠をのせて行うリレー(ひとり条件)、②月齢の近い同性同士がペアを組んで２人で一緒に移動するリレー(ペア条件)である。子どもたちは、王冠が落ちた場合には自分で拾うように教示されたが、頭にのせる際には補助の大人が手伝った。

(4) 分析測度： バーを越えた時点から、もどってもう一度バーを越えるまでの①時間（秒）および②王冠を落とした回数（回）を分析測度とした。

(5) 結果と考察：

①１．ひとり条件： 図には、ひとり条件における速さの変化が示されている。ここから、「他児」については、Ⅰ期からⅡ期にかけて速くなっていることがわかる。年齢別にみると４歳児クラスでは 15.2 秒、５歳児クラスでは 8.3 秒減少していた。一方、「気になる」子どもでは、Ⅰ期からⅡ期にかけてやや遅くなっていた。

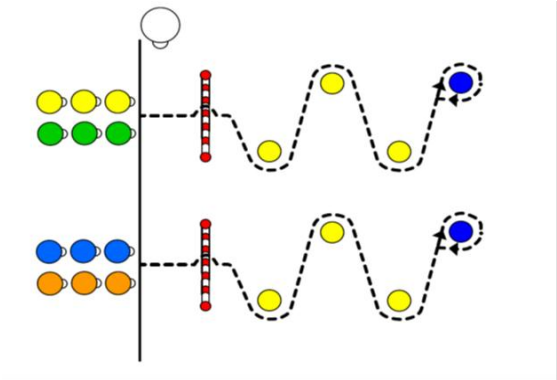
図３ ひとり条件のコース

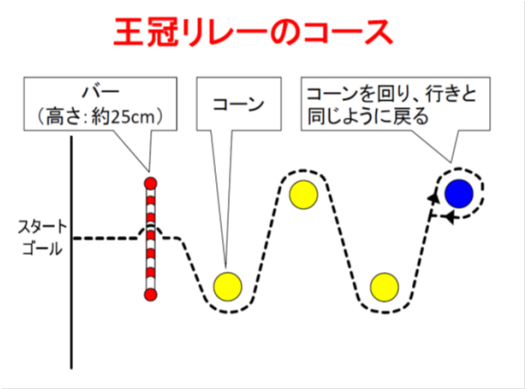

図４ ペア条件のコース

②ペア条件： 図３には、ペア条件における速さの変化が示されている。ここから、ひとり条件と同様に「他児」については、Ⅰ期からⅡ期にかけて速くなっていることがわかる。また、「気になる」子どもについてもⅠ期からⅡ期にかけて速くなっていたが、どちらの時期においても「他児」よりも時間がかかっていた。

(6) 考察：これらの結果から、「気になる」子どもの問題は、自分自身で運動協応を行う「ひとり条件」よりも、「ペア条件」において顕著になることが明らかになった。

ペア条件では、自分自身の運動調整を行うと同時に他児の運動との調整を行う必要がある。いわゆる二重課題（dual task）条件となっている。

したがって、「気になる」子どもは、このような二重課題そのものが難しいのか、とりわけ対人関係の調整を含む二重課題のため困難さなのかは明らかではない。

いわゆる典型的な発達を示している子どもでは、認知的、運動的負荷の増加というから「単独課題＞二重課題」となる。DCD の子どもでは運動協応の全般的な難しさから「単独課題＝二重課題」となることが知られている。

一方、「気になる」子どもの場合は、行動特徴としては典型発達児と DCD 児との間

に位置するが、運動協応課題については課題の複雑さにより大きく影響を受けるため「単独課題＞＞二重課題」となるのではないかと考えられる。また、「気になる」子どものこのような傾向は、対人関係の調整を含む二重課題においてより顕著になるのではないかと考えられる。

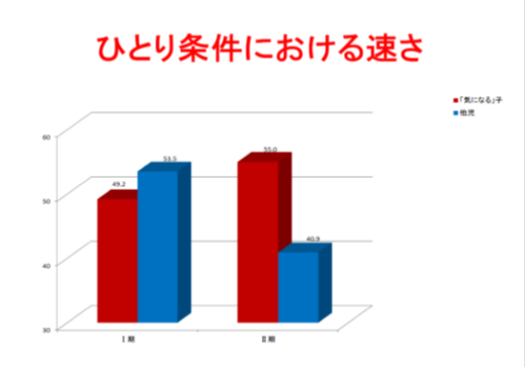

図５　ひとり条件の速さ

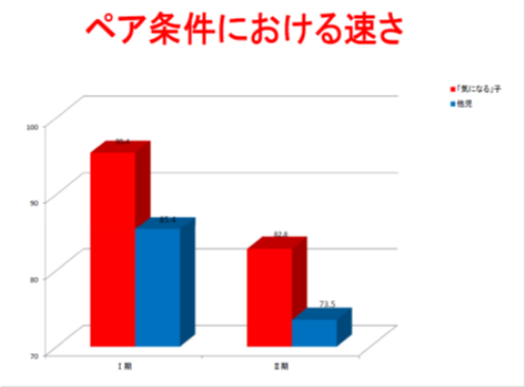

図６　ペア条件の速さ

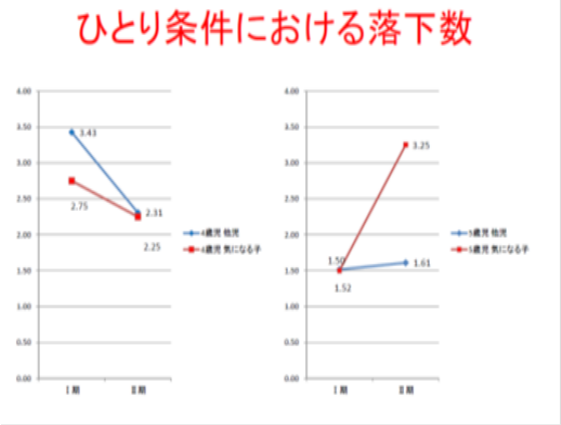

図７　ひとり条件における落下数

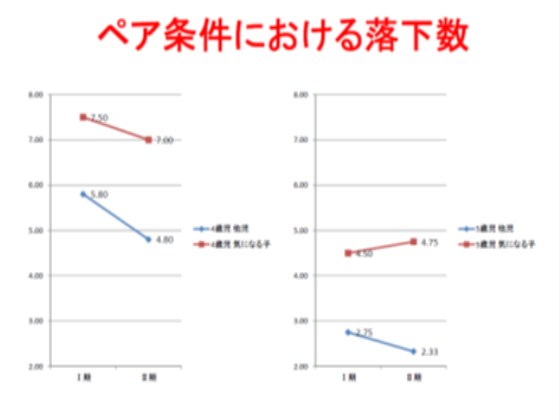

図８　ペア条件の落下数

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計４件）

①本郷一夫、平川久美子、進藤将敏、碓井貞治、碓井百合、「気になる」子どもの運動発達と有能感に関する研究２、日本教育心理学会第 55 回総会、2013 年８月 18 日、法政大学

②本郷一夫、平川久美子、進藤将敏、碓井貞治、碓井百合、「気になる」子どもの運動発達と有能感に関する研究１、日本教育心理学会第 54 回総会、2012 年 11 月 24 日、琉球大学

③飯島典子、本郷一夫、平川久美子、進藤将敏、吉田栄恵、藤澤沙央理、米谷和世、碓井貞治、碓井百合、保育所におけるサッカー巡回指導に関する研究 9　―タッチゲームと運動発達に関する保育者評定との関連に着目して―、日本発達心理学会第 23 回大会、2012 年３月９日、名古屋国際会議場

④本郷一夫、飯島典子、平川久美子　幼児期における運動協応の発達５　－「王冠リレー」における「気になる」子どもの特徴－、日本教育心理学会第 53 回総会、2011 年 7 月 26 日、北海道立道民センターかでる

６．研究組織

(1)研究代表者

本郷　一夫（HONGO KAZUO）
東北大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：30173652

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：